

2022年5月30日

子どもをほめる言葉、 どれだけ持っていますか？

～ 授業の中で自尊感情の育成を！ ～

先日、県教委の人事主事訪問で学校を回っていますと、小学校2年生で「うれしいことば」の授業をされていました。「人から言われてうれしかったことばは何？」と、先生と子どもたちがやり取りをしながら作り上げていく授業です。プラス言葉の獲得やその語彙(ごい)を増やしていくことは、子どもたちの自尊感情の育成と人間関係づくり(なかまづくり)に大きな影響があります。その授業を見せてもらいながら、もうだいぶまえになります。SSW(スクールソーシャルワーカー)の上村先生からもらった彦根市の新任教員向け資料を思い出しました。「仕事で行ってる彦根の学校で、初任の先生向けに配られた資料です。(中身が)よかったので、私、教育長に渡そうと、一部もらってきました。どうぞ。」と。こんなやりとりでした。

数年前に紹介しましたが、もう一度『教育長だより』に載せます。(裏面に印刷)これを見て、まずは私たち教職員の「ほめ言葉」の語彙(ごい)を増やしましょう。(こんな言い方もあるのかという発見を！)

ところで、『授業はドラマである。』とも言われます。先生が必死で考えた授業案ですが、本番はなかなかそのとおりには行きません。だって、授業は子ども相手の「生(なま)もの」ですから。しかし、授業のはじめに板書している「本時のねらい」をしっかり把握していれば、全体がぶれたりすることはありません。そして、そんな中でこの「ほめ言葉」が効果を発揮してくれるのです。子どもたちの「学びたい」「わかりたい」という気持ちをどんどんふくらませることにつながる言葉だからです。子どもたちの授業への参加意識を大きくしてくれます。

ただ、気をつけなければいけないのは、こうした「ほめる言葉」を、先生が本気で(心の底から)言っているかということです。先生の言葉が「おあいそ」か「本心」かを、子どもたちは瞬時に見抜きます。「授業はドラマである」という意味は、こういうプラス評価の言葉を先生が気持ちを込めて発するとか、あるいは演じきることが大切です。どうですか？ みなさん、ゆめゆめ顔をこわばらせてはほめておられないと思いますが。一度、自分の授業をビデオ撮りするといいいのですが。いずれにしても、その語彙を増やす努力は続けたいですね。

「すごいね！」「ありがとう。」「そうか！よく気がついたね。」「それは、先生も気づかなかった。」などなど。みなさん、どれくらい子どもをほめる言葉を発信していますか？ こういう言葉でほめられると、子どもたちは「やったー！」とか、「よし！次もがんばるぞ！」という気持ちをどんどんふくらませます。また、子どもをほめる言葉がけが豊かな先生ほど、授業力があると言われる。授業中の子どもの発表はもちろん、机間巡視しているときに耳にした子どもの「つぶやき」にも、すかさず評価の言葉を返していく。そんなすてきな授業になるといいですね。

大人も同じです。

子どもだけでなく、私たち教職員も同じです。あなたの校園所(職場)では、お互いをプラス評価する言葉が飛び交っていますか？ 前に見たテレビ番組では、企業研修に「相手をほめること」を取り入れている会社が紹介されていました。講義とワークショップです。今、職場ではこういう研修がどんどん増えているそうです。チーム力を向上させるためには、人間関係づくりは基本中の基本ですからね。